

Pre-News Letter No.16

18年 10月19日(木) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



岩倉実相院の床に映った紅葉 (床紅葉と言われるそうです)

<http://www.jissoin.com/guide/>

アメリカ事情

田中 克典 (地球研)

アメリカ事情

田中 克典 (地球研)

2006年9月14日から21日までの7日間、岡山大学の加藤謙司先生と同大学の研究員である明石由香利さんに同行して、アメリカまで旅に出た。行き先は、ニューヨーク植物園、そしてノースカロライナ州アッシュビルである。目的は植物園での標本調査とアッシュビルでの学会発表である。今回は標本調査について報告する。

なぜ、植物園で標本を閲覧するのか？私はメロンの起源を解析している。メロンの起源はアフリカとされているが、その祖先型野生種については明らかにされていない。アフリカにはメロンと同属異種の野生種が自生している。メロンの祖先型野生種を解明するには、この野生種の種類や分布を把握しておかなければならない。そこで、植物の標本が多数収蔵されている植物園に赴くことで、野生種が採集された地域とその種類が効率よく知り得ることが出来る。



→これまでに、ニューヨーク植物園が標本を収集するために訪れた国々(図の緑色)。メロンのふるさとであるアフリカが特に少ない印象を受けた。やはり自分の足で訪れる必要性があるようだ。

雨の中、ニューヨーク植物園に到着した。マンハッタンの中心部から約16km、電車で30分ほどの郊外である。ちなみに、電車の速度はさほど速くない。植物園は静かな落ち着いたところで、もし晴れていれば標本の閲覧はほどほどにして園内の散策へと足が動いていただろう。



→植物園の職員室と標本保管庫は、立

派な建物であった。保管庫は4階までであった。

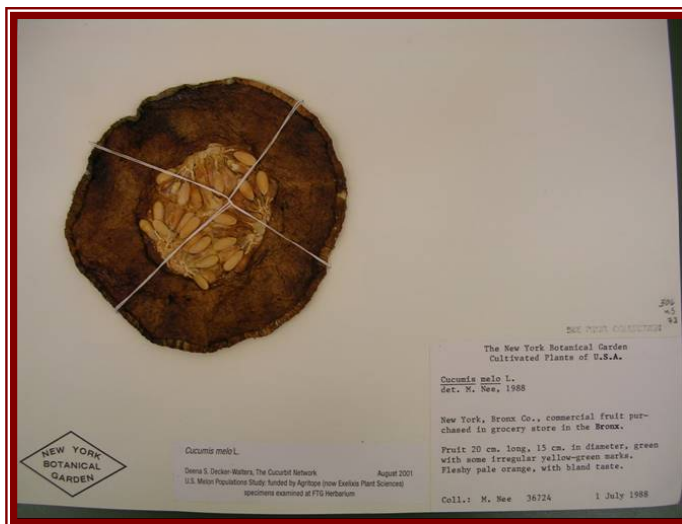
植物園へは事前にメールで予約を入れて訪問した。植物園で収蔵している標本総数は600万点余と莫大な数だ。ウリ類の閲覧だけでも一日では済まないだろう。収集した植物については標本として保存する他に、一部展示として陳列されていた。ここにもウリ類があり、重要な作物であることが伺えた。標本庫は予約を入れれば自由に何時間でも閲覧できる。予約一本で全てオープンとはすごいもので、なかなかまねできることではない。



標本は常温、乾燥の状態で保存されているので保存状態は良い。100年近く経過しているにもかかわらず、葉は緑色であった。DNAが容易に抽出できそうである。

←メロンがある保管庫をあけてみると、標本で一杯であった。でもなにやら異臭が漂っていた。

また、標本の用いた部位には驚かされた。標本は、主に茎と葉が保存されていたが、中にはメロンの直径10cm程度の果実が薄切り、もしくは半分に割って種子付きで保存してあった。種子は発芽可能なほど状態がよかった。ぜひ、水を与えてやりたかった。



↑ 異臭の原因はこれ。1988年の果実の輪切り。ダイナミックな標本である。

種子は発芽可能なのではと思うほど色がよかった。



←イネの標本。標本はただ保存しておくだけでなく、外部から訪れる研究者や市民に公開していた。

ハイテクノロジーの時代、情報を片っ端からデータ化してパソコンの前で文字や画像として見ることができるが、データ化された情報はほんの些細な衝撃で消えるほど不安定なときがある。そこへいくと、標本は保存状態さえ良ければ長期間にわたり情報が得られる。また、標本はDNAが抽出できるため、遺伝学的解析にも利用できる。これは、大きな利点である。さらに、生前に近い状態で見るとは、パソコンの画面で平面的な画像を見るより遙かに訴えることが多いのではなかろうかと思う。

メロンの起源を解析している傍らで、弥生文化博物館で収蔵されている日本各地で収集された植物遺物を整理・データベース化しているが、いつか標本として閲覧されることを思うと心してかからねばならない。



アメリカでみかけた奇抜なカボチャ

Topics

佐藤 P 畑からメロンのお便り

世界最小のメロンが出来ました。直径 2cm 程度ですが、一人前にメロンの香りがしています。ころころしていてかわいいです。食べられるのか！？いやいや、一応食べられるようです。でもメロンは切って種を取って皮を残しつつ食べるという概念の強い私にとっては、一口で皮まで食べないといけないところが少々考えモノです。しかも、このメロンを作った張本人(今回の PNL 執筆者:田中克典さん)は「食べても良いけど、種子は残して」と言うので、味を見ることは断念しました。今度はぜひ食べられるメロンが出来ることを願っています。



佐藤プロジェクト HP

<http://www.chikyu.ac.jp/sato-project/index.htm>

佐藤プロジェクトの活動内容を公開中です。

(Topics 担当：大島)